

江戸時代の古地図に見るオーストラリア

森 本 峰 子

Australia in the World Map during the Edo Period

Mineko Morimoto

Abstract

While attempts were being made in Europe to discover the “Terra Australis Incognita” (unknown southern land), imaginary land which had long been thought to exist at the bottom of the earth since the times of Greek geographer, Ptolemy, Japan was under National Isolation Policy.

It was not until Captain Cook’s explorations that precise maps of Australia and New Zealand were drawn. Captain Cook also found that the legendary land which had been thought to occupy the whole bottom of the earth did not exist.

In Japan, however, cartographers kept on producing out-dated maps. The shape of some land masses especially that of Australia differed according to Buddhists, Confucianists, and those Japanese Dutch scholars who were so-called positivists. It was a Japanese feudal government officer, Kageyasu Takahashi, who finally drew the first correct map.

Though the Japanese government publicly acknowledged Confucianism to be the “orthodox” ideology, they on the other hand pursued European knowledge. However, this knowledge was restricted to themselves. That is why private scholars were behind the times.

In this essay, three styles of maps of Australia during the Edo Period are described along with the discussion as to why such lack of unity occurred.

はじめに

江戸時代に作成された世界地図を見ると、あまりに多様な形に目を見張る。特にオーストラリアの形は千差万別である。幕府の鎖国政策のもと、日本人は自ら航海して世界の形を確かめる事もかなわなかった。故にこの混乱は主に地図製作者が拠り所としていた原図の不正確さが一因となっている。

しかし、子細に地図を検討してみると、意外な事実が浮かび上がってくる。地図製作者達の属する学問グループ（派閥）によって、オーストラリアの形が如実に異なること、また、探検航海が進み、西洋からのより新しい地図をどん欲に自分たちの地図に反映させようとしたグループがいた反面、旧態依然とした形を奉持しようとしたグループもいたことである。

この稿では、地図製作者を仏教系、朱子学系、蘭学系の三グループに分類し、それぞれがオーストラリア探検史の中のどの地図をもとにしているか考察する。また、いろいろな角度から地図の不統一という混乱が引き起こされた原因を探ってみる。

I

日本におけるオーストラリアの地図について述べるにあたり、ヨーロッパにおける地図製作の経緯を簡単にたどってみることとする。

地球の南方に大陸が広がっているという考え方は紀元2世紀のギリシャ人地理学者プトレマイオスに遡る。北半球にある陸地とほぼ同じだけの陸地が南半球にもあるに違いないと考えたのである。秀吉にも献上されたオルテリウスの「世界地図帳」(1570)は当時としては最良のものであるが、伝説的な南半球の大陸を未確認のまま載せている。

大航海時代の先駆けともなるのは、ポルトガル人マゼランである。マゼランは1520年にマゼラン海峡を発見した際、ティエラ・デル・フェゴ島を伝説の南方大陸の一部と思いこんだ。これにより南方大陸の全貌を知るための探検航海の気運が高まったのだ。

1642年のオランダ人タスマンによる「仮想の南方及び東方大陸の発見と探検のための航海」では、「ニュー・ホランド」とタスマンが命名した陸地が完全に航行可能な海に囲まれていることが立証できた。

オーストラリア、ニュージーランドの正確な形が測量されるのは1768-71年のキャプテン・クックの航海を待たなければならない。この時、ニューギニアとオーストラリアを隔てるトレス海峡の存在も確認された。しかし、タスマニアが半

島でなく島であることがわかったのは、1798年になってからであった。

このような探検航海の結果が、必ずしもすぐに地図に投影されたとは限らない。タスマンの航海のわずか4年後、1648年にオランダ人地図製作者、ヨハネス・ブラウはその諸発見を世界図に載せた。しかし、タスマンの発見が一般の地図に載るようになるのは、20年も先のことであった。ブラウもブラウ商会発行の人気の地図帳には、旧態依然とした南方大陸図を使い続けた。ルイス・ヴァス・デ・トレスによる1605年のトレス海峡の発見にいたっては、1世紀半も古文書館に埋もれ、クックにより初めて立証された。

上述で明らかなようにヨーロッパの地図製作者の間でも少なからず混乱があり、クックの探検以前には、想像も交えた多くの不正確な地図も出回っていた。探検航海が進むにつれ地図が次々と新しく書き換えられたわけではなかったのだ。

II

次に、日本の地図の歴史に眼を移してみる。

種子島にポルトガル人が漂着する1543年まで、日本人にとっての世界とは、本朝（日本）、唐（中国）、天竺（インド）の三国にすぎなかった。その後南蛮貿易が行われるに従い、日本人の世界観も広がっていった。ポルトガルからもたらされた地図は屏風絵として残っているが、下方に雲の様に広がっているのが南方大陸である。

日本で初めて正確な世界地図が刊行されたのは、1810年のことである。幕府天文方である高橋景保の作った「新訂万国全図」がそれである。イギリスのアロー・スミスの地図を主に元になっているのだが、日本が真ん中になるよう、東半球図と西半球図を入れ替え、また、京都を中心とした半球図を副図にするなど独自の工夫がされている。日本に関して言えば、間宮林蔵の探検や、伊能忠敬の九州を除く全国測量の結果を記載している。景保の世界図で、オーストラリアに関して特筆すべきことは、1768年から71年にかけてのクックの第一回探検航海の航路を書き入れ、その成果であるオーストラリア、ニュージーランドの形が正しく描かれていることである。タスマニアも半島でなく島として記載されている。鎖国時代によくこれだけ、と現代人をもうならせる出来映えである。

しかしながら、景保の地図に到るまでは紆余曲折甚だしい道程であった。それを検証するために、仏教系、朱子学系、蘭学系の地図製作者達がどのようにオーストラリアを描いているのか見て行く事にする。

III

仏教系

我が国最古の世界図は、法隆寺にある「五天竺図」(1364)である。うちわ形の天竺の中には玄奘三蔵「大唐西域図」の旅程が朱線で引かれ、山や建物、地名がびっしりと書き込まれている。奈良時代の人たちにとっては世界はこれですべて説明がついたのである。現代人にとっては一見荒唐無稽なこの形の世界地図が、江戸時代になっても描かれ続けた。しかし、ヨーロッパ諸国の存在はもうすでに知られていたもので、無視するわけにはいかなかったのだろう。宝永年間(1704-11)頃のうちわ型仏教系世界図ではうちわ型の形はそのままに、左上方隅に、トイチランド(ドイツ)、フランスなどいくつかのヨーロッパの国々の名を記している。それによってヨーロッパの国々もすべて仏道に帰依しているかのような印象を与える。1809年の古屋野意春の「万国一覧図」において意春は、現代人の目から見ると無謀とも思える工夫をしている。地図は従来のうちわ型ではなく、一見世界地図の様相を呈しているが、中心のアジアばかりが大きく、南北アメリカ、ヨーロッパ、アフリカなどは、縮尺を度外視してゆがめられ、紙の隅に追いやられている。地図最下方に、南極とオーストラリアがくっついた大陸が影のように描かれているものの、地名の記載はない。

地図の囲みの中には“布置シテ無益ナル地八方位度数二拘ラズ是ヲ縮地ス。(中略)紙面ノ無益ニ広濶ニ及ハンコトヲ厭テナリ”¹と記されている。

意春は学塾香山楼を主催する儒医であり、「社中塾童にだけ示す」² 目的でこの地図を描いたという。これが高橋景保の「新訂万国全図」の前年に出された事を考えると、実証的学問の世界とは別に伝統的な三国世界観が未だに根強く残っていたことが如実にわかる。鮎沢信太郎は、「鎖国時代 日本人の海外知識」において次のように述べている。

「わが鎖国時代の世界図は海外から与えられただけの資料によって作られたので、実証から離れた想像の働く余地を多分に許されていた。そのために与えられたもとは同一の世界図でも、これを受けた側では各々自由な考え方によって、それを自家の都合にもっとも適した形に消化した。そうして、そこに各々信ずる形の世界を地図面に表現した。乃ち鎖国時代に製作された世界図はその図のできた頃の日本人の心に描かれた世界をそのまま図示したものである。」³

上記の記述は特に三種のうち、仏教系地図にあてはまる。仏教の僧らは、西洋から入ってきた実証的な精神に基づいた新知識を自分たちの教義に取り入れざるを得なくなると、新しい心象世界を地図に投影したのである。

マテオ・リッチ系地図（朱子学系地図）

イタリア人のマテオ・リッチ（利馬竇）(1552-1610)は、ザビエルに続いて中国への入国に成功したイエズス会士である。中国での布教活動の一助として木版刷りの「坤輿万国全図」(1602)を出版した。アピアヌス図法により、全世界を楕円形の中にあらわしたこの世界図は、地球球体説も中国に広めることになった。

リッチが地図を作成する際用いたのは、1570年のオルテリウス、1590年のメルカトル、1592年のブランシウスの地図などであったといわれる。これらの地図はプトレマイオスの地図を踏襲し、伝説の南方大陸を地図下方に横たわらせている。⁴

マテオ・リッチの「坤輿万国全図」は、まさにその未知の南方大陸を「墨瓦臘泥加」（メガラニカ、マゼランに由来）として五大州（他に欧羅巴、利未亜、亜細亜、南北亜墨利加）の一部に加えている事が特徴である。この縦約1.79m横4.14mもある大型の地図の下方は、南極と続く巨大な大陸となっている。南極あたりは「夜国」と表記され、その上方のオーストラリアあたりは、「此南方地、人至者少。故未審其人物如何」⁵の注記がなされている。マテオ・リッチは中国人に受け入れやすいよう、世界の真ん中に中国を配置し、また、漢字で地名や説明を表記したので、同じく漢字を理解し中国の隣に位置する日本人にも役立つものとなった。

実は、この地図こそ、朱子学者によって繰り返し描かれた地図の原型なのである。我が国においては作者不明の1652年の「万国総図」が最初のマテオ・リッチ系地図の刊行であったと言われている。オーストラリアあたりに「自是南方地。人到者少。故未審其人物如何」⁶と書いてあるが、マテオ・リッチの記載とほんのわずかな違いがあるだけである。日本の地図製作において当時第一人者であった石川流宣は、この万国総図を元にして、「万国総図」（1708）を表した。この国の南には、「万国総図」と全く同じ説明文が書かれているが、全体に「万国総図」より形が雑で、「伝言ゲーム」のようにマテオ・リッチの地図からかけ離れて行く過程を示している。1708年といえば、ヨーロッパでタスマンの発見が一般の地図にも記載され、オーストラリアが周航可能であることがとうに知られていた頃である。しかし、この地図は、正確さには欠けるものの色彩や形の美しさゆえ、ほぼ1世紀にわたり人気を博した。

マテオ・リッチ系地図として石川流宣の後を受けたのが長久保赤水の「地球万国山海輿地全図説」(1788)である。赤水は1720年に刊行された原目貞清の「輿地図」をリッチ図と共に参考にしたとされ、説明文は両者のものを取捨選択したものと考えられる。

1788年には既にキャプテン・クックの航海によるオーストラリア、ニュージーランドの詳細な地図がヨーロッパで刊行され、日本でも蘭学者により続々と西洋知識に則った世界地図が刊行されていた。180年以上も前の、旧態依然とした未知の南方大陸図を赤水は、何ら恥ずる事なく刊行したのである。

蘭学系の世界地図

大航海時代に突入し、数々の新発見がヨーロッパ人によってなされるようになると、新知識の取得は何と言ってもオランダ語を学んだ蘭学者達が一番有利であったろうことは想像に難くない。鎖国日本は唯一長崎に唐船と蘭船の寄港を許していたからである。

しかし、その蘭学者とて、新しい情報を次々に順序よく手に入れられたのではないことは、彼らの描く地図に如実に現れている。1775年の南極とオーストラリアが一体化している林子平の地球図は長崎で手写したものだといわれるが、両半球図のうち東側には、南極から「新忽爾蘭埃亜」(ノウハホルランデヤ)が巨大な半島のように迫りだした形をなしている。

1792年の司馬江漢の「地球図」は初の銅版印刷であり、確かにオーストラリアは南極と独立しているが、フランスのジャイヨが描いた地図そっくりである。ジャイヨはタスマンの航海の後、オランダ人が未知の部分を白く残しておいたのを嫌い、想像で未探検の部分の陸地線を入れてしまった。そのためオーストラリアとニュージーランドが一体となった妙な形の地図になってしまったのだ。それがオランダに逆輸入され、アムステルダムで印刷されたのを、大槻玄澤が蘭外科医ストットルから入手し、それを司馬江漢が刊行したという。

オーストラリアには「メガラン大州、メガラント云人、始メテ見出セリ、故二名ク」とあり、「ノウハホルランド、新ヲランタト云」⁴と書かれている。

1796年には橋本宗吉が木版色刷りの「蘭新訳地球全図」を出版しているが、オーストラリアの東半分が未確認で白く抜けているところを見ても、古い地図を典拠としていることがわかる。

宗吉の地図について鮎沢信太郎は次のように述べている。

「宗吉の地球図は説明と図が一枚の中に出ている。地図にも説明にも斬新なところが少なくないのに中には不思議な話も想像上の陸地も入っている。その他序文が記してあるかと思うと天文のことも書いてある。このころ江戸では司馬江漢が盛んに地動説を宣伝したが、宗吉の地図ではまだ天動説を取っている。この地図は、地誌的説明と地図が分離仕切れない所、新旧とりまぜた説明、漢洋混淆の説明等、いいかえれば古い殻から抜け切れない所に特徴がある。」⁵

宗吉の地図は西洋式地図への過渡期の形態であると言える。

1802年には、石塚催高が「円球万国地球全図」を刊行しているが、オーストラリアの形に関していえば宗吉の地図と同じく、150年以上も前のブラウの地図と変わらない。

端的に言えば、1810年の高橋景保による「新訂万国全図」が出るまで、蘭学者の間でも、最新の情報に基づいた正確な地図は、刊行されなかったのである。

オーストラリアの地図に関していえば、景保一人がヨーロッパの探検航海の成果を一気につかみ取ったといえる。

IV

それではなぜ、このように不統一でありかつ不正確な地図が横行したのだろう。地図製作者、幕府、出版事情、民衆それぞれの観点から探してみる。

地図製作者

地図製作者の立場からすると、三者三様の理由が考えられる。

仏教的地図製作者にとって、地図は、現実の世界を縮尺で縮めたものではなく、宗教的な精神世界の表象であった。キリスト教国であるヨーロッパやアメリカ、また人跡未踏だと考えられていたオーストラリアなど仏教圏の外にある国々は、無視して構わないと考えられた。彼らに世界地理の新事実など興味の対象ではなかったのではないか。

朱子学者達についても同様のことが言える。日本には古くから中国の文物を珍重、崇拜してきた歴史がある。頼祺一の言うように「それまでの儒者知識人にとって、学ぶべき歴史とは、実は中国の歴史にほかならなかった。かれらにとってそれが世界史であり普遍史であった」⁶のだ。また、儒教的な考え方として、古い物を敬う心、古ければ古いほど有り難いということがあった。マテオ・リッチの世界図が中国で初めて作られた物なら、それは「古典」のように貴ぶべきだと朱子学者

達は考えたのではないか。また、漢字以外読めない朱子学者達は、西洋の書物を考証することもできなかったので、マテオ・リッチの地図を信奉することしか出来なかったともいえる。勿論蘭学者達に対する対抗意識も多分にあったろう。フィールドワークをしていないので、本当のところは誰にもわからなかったのだ。

しかし、1788年に赤水が世界図を描くより70年以上前、マテオ・リッチの図よりブラウの地図の方がはるかに正確だと知っていた日本人が居た。新井白石である。「西洋紀聞」(1715)には密入国したイタリー人シドッチを1709年に尋問したときの様子が次のように記されている。

「我今大西人に遭ひて、欧羅巴鏤板の輿地図を出して、其説を問ふに、彼其図を見て、これ七十年前、ヲ、ランデヤ人の鏤し所なり。其精妙いふべからず。今は西洋地方にも得易からざる所也」といふ。」⁹

白石が用いたのは、タスマン航海の記録を元に出版したブラウの1648年版と思われる。実際に確認できた陸地のみ、地図上に現されているため、オーストラリアの東半分は、白く抜けているし、巨大な南方大陸も消えている。

赤水が、『西洋紀聞』を読んだかどうかは不明である。この原稿は、新井家に秘蔵され、1793年に白石の玄孫が幕府に献上。初めて刊行されたのは、明治に時代が移ってからの1882年だったからである。幕府の重臣であった白石が、妄りに立場上知り得たことを刊行したりすれば、とがめを受けるのを白石は重々知っていたに相違ない。

たとえ白石の記録を読まずとも、赤水には蘭学者の刊行した地図を目にする機会はいくらでもあった。興味深いのは、蘭学者橋本宗吉の「蘭新訳地球全図」(1796)に赤水の校閲を受けたことが記されていることである。宗吉の両半球図は、決して正確な地図ではないが、マテオ・リッチの地図から比べれば、格段に実勢に近い。赤水自身は、宗吉の地図の校閲をしながらも、古いマテオ・リッチを元にした地図を出して版を重ねるのである。室賀信夫はこのことについて「農家からでて儒者となった赤水の関心は何よりも農業生産をささえる国土にあり、また封建的教学を根拠づける古典的中国にあって、それを越えたかなたの西洋は、彼の心の中に大きい座席を占めてはいなかったようにみえる。」¹⁰と述べているが、筆者は、それを疑問に思う。赤水は「官学」を背負って立つ朱子学者としての面目を保つために、マテオ・リッチ系の図を掲げざるを得なかったのではないか。一方彼の学者としての良心が、宗吉の地図に「校閲」という「お墨付き」を与えることで暗に西洋の実証主義に基づく世界図を認めたと言うことではないだろうか。

1720年、徳川吉宗が実学を奨励し、洋書輸入の禁をゆるめると、長崎の出島から、洋書が鎖国下の日本にも入ってくるようになり、蘭学を学ぼうと志す者がでてきた。オランダ語の辞書もろくにない状態でそれらを解読するのがどんなに困難を極めたかは、杉田玄白の『蘭学事始』に見る通りである。

「蘭学」とは、科学的実証主義の学問であり、陰陽五行の在来科学に対決するものであった。蘭学といっても医学系、天文暦学系があり、また、西洋事情の研究も含まれた。

江戸時代の地図には、地名の他に、国の歴史や人物、風土、気候などの記述がされているものがあるが、それらの記述も西洋事情の一種といえるだろう。しかし、海外事情の研究、紹介は幕府と共生関係にある蘭学者なら問題はないが、そうでないものにとっては、資料収集も困難であり、時によっては命の危険さえもあった。封建制批判は、幕府が一番恐れていたことだったからである。思想抑圧策による林子平の処罰、蛮社の獄などがその例である。

幕府天文方の高橋景保のみが、最新の情報による正確な地図を作ることができたのは、上記のような事情があると考えられる。

幕府

江戸幕府が、長く政権を保つことができた理由の一つに、朱子学を官学としたことがあげられるだろう。日本の朱子学の真の開祖は、藤原惺窩(1563-1619)の弟子の林羅山(1583-1657)である。朱子学が幕藩体制のイデオロギーとして採用された理由を王家華は次のように述べている。

「羅山は幕府の規定した礼儀、法度を「上下定分の理」の外的表現と見なし、「天は尊く地は卑し。天はたかく地は低し。上下差別あるごとく、人にもまた君はたふとく、臣はいやしきぞ。その上下の次第を分けて、礼儀、法度といふ」と言った。この礼儀を敬うことは、彼の眼前の封建的な階層的秩序に随順することに通じる。仏教、耶蘇教、神道ないし陽明学より、林家朱子学の方が幕藩制国家の支配者の必要に最も適応するものであった。」¹¹

幕藩体制が朱子学の思想なしには維持できなかったため、幕府は、時として狡猾に自分たちの敵を滅ぼそうと企む朱子学者達の要求に答える必要があった。朱子学者が、朱子学に同調しない儒学者—古学、折衷学、考証学、石田心学、懷徳堂学派—への弾圧して、落ち目になった主導権を奪回しようとしたのが寛政異学の禁だと王は書く。

幕府は、一応朱子学者の言いなりになったように見せかけてはいるが、寛政異学の禁は、全国的に諸藩に命じたのではない、昌平講での教育を、朱子学に統一しただけのことである。

幕府にとっても朱子学者にとっても共通の敵は、体制をゆるがす新しい思想であった。——蘭学がもたらす西洋思想である。西山松之助の『甦る江戸文化』では、版元である蔦屋重三郎、須原屋茂兵衛などの周辺には、春信、歌麿、写楽、北斎、広重などの浮世絵師がいただけでなく、平賀源内、森島中良、司馬江漢などの文化人がそれぞれに文化グループを構成し、活発な文化活動をし、出版企画もつぎつぎあったと書いてある¹²。

そのような、活気のある文化の反面、幕府は出版物取り締まりにも精を出している。出版取締令の三本柱は、1. 治安維持、2. 風俗取り締まり、3. 宗教統制であった。特に、治安維持では、「異説」などを取り上げた本の出版を禁じたのである。

一方、ロシアの船の来航など、対外関係の危機化は、幕府に蘭学者を動員して、世界地理書、外交文書の訳出、ショメールの百科事典などの調査に努めさせることになった。1811年には、暦局の付属機関としての蘭書翻訳の部局、「蛮書和解御用」が創設された。つまり、喉から手がでるほど幕府が渴望した西洋事情、新技術取得のために、朱子学の「敵」を公的に利用しようとしたのだ。

幕府が蘭学とも手を結んだのではないことは、『三国兵談』で北方の脅威を知らしめようとした林子平の過酷な処罰を見てもわかる。林子平の親友の森島中良も西洋事情に関する本を出版しようとした。広告の近刊予告には「朝鮮話」「紅毛知恵洋」「西洋奇譚」「万象雑俎」「農工力ぐるま」など、天文地理、万国世界の奇談、発明品の紹介の本が記載されているが、出版されることはなかった。中良が、幕府に召し抱えられたからである。¹³

幕府によって弾圧されるか、あるいは召し抱えられて口封じされるか、同じ志を持っていても親友同士の運命は両極端に違ってしまった。いずれにせよ、正確な西洋の情報が一般の目に触れることは少ないのである。

渡辺華山は、「再稿西洋事情書」において、幕府の情報統制、秘匿は、ナチュール（天意）にそむくとし、西洋諸国では、恥ずかしいことだと書いている。そして、7日目ごとに新聞が出ることも「窮理」の考えからと考えた。¹⁴ 華山は、この稿を出版せず、家に置いておいただけなのだが、それだけでも罪になったのである。

西洋の科学技術を研究していれば、それを生み出した文化が如何様なものか知りたと思うのは当然のことであろう。華山は、そこで、西洋の思想的原理が、幕藩体制よりもずっと優れていると気づいたのである。

それこそ幕府が最も恐れていたことであった。華山は陥れても潰さなければならぬブラックリストに載ったのである。蛮社の獄(1839)の後、翌年5月には、売薬看板にオランダ文字を書くことの禁止、西洋翻訳書、究理書の出版、販売の制限も強化された。

1849年には、「外科、眼科以外は、蘭方参用を厳禁す」と言う令が出された。その30日後には、蘭書翻訳取締令も出た。西洋医学が広まるにつれ、東洋医学—すなわち漢方—が押されたため、漢方医からの突き上げがあったと考えられる。

上記にいろいろ例をあげて示したように、蘭学の実証的側面は、幕府によって利用されたが、吝嗇な幕府は、それらを一人占めしようとしていたのである。

出版事情

これまで書いてきたような幕府の方針により、蘭学関係の本は、危険を顧みず、採算を度外視する太っ腹の版元でなければ出版できなかった。その一人が『解体新書』を出版した須原屋市兵衛である。絶版処罰を覚悟の上で、杉田玄白が出版したことは『蘭学事始』に「若し私かにこれを公けにせば、万一禁令を犯せしと罪蒙るべきかも知られず。この一事のみ甚だ恐怖せしところなり」¹⁵と書いている。

しかしながら、幕府の弾圧に対し、庶民もしたたかに抜け道を見つけている。「出版統制令」の抜け道は、写本を貸本にして広めるというやり方である。先に筆者は、1810年の景保の「新訂万国全図」が最初の正確なオーストラリア地図であるとしたが、それは「刊行された」という意味で、実は写本によってそれ以前にかなり正確な地図が出されているのだ。桂川甫周の「北槎聞略」(1794)に付いている地図である。これは司馬江漢や橋本宗吉とは比べものにならない程正確である。オーストラリアとタスマニアがつながっているが、当時は島だと知られていなかったもので仕方がない。桂川甫周は將軍の侍医の弟でこの本を幕府に献上したが、それが密かに写本として世に出たのだ。幕府に近いもののみが知り得た情報を、法律の抜け道をくぐって、甫周は世に知らしめたのである。

庶民—読者

これまで書いてきた朱子学者、蘭学者の事情は、すべて知的階級のことである。一般庶民にとって、外国は鬼の住む所であるように思われていたことが江戸時代の浮世絵を見るとわかる。長崎のカピタン一行の江戸参府ぐらいしか、西洋人を見る機会はなかったのだ。

庶民の間で、根強い人気でもてはやされたのは、マテオ・リッチ系の地図である。まず石川流宣の「万国総界図」がほぼ1世紀にわたって人気を博し、次に長

久保赤水の「地球万国山海輿地全図説」が後を継いだ。これは、一重に、流宣、赤水の兩人とも日本地図の第一人者であったことによる。「流宣図」として知られる日本地図は海賊版が出るほどであったと言われるし、また、赤水が20年かけて作った「改定日本輿地路程全図」は、伊能忠敬が地図を作るまで日本で一番正確な地図であった。伊能図は幕府の秘図として公開されなかったので、江戸時代の終わりまで、赤水の死後も、何度も再版された。

流宣、赤水と言うネーム・バリューが世界地図を購入する際にも魅力的で、信頼のおけるものと、映ったのだろう。

結び

鎖国の世の日本人にとって海外の国々は生涯決して訪れることのない、幻の世界であった。しかし江戸の人々は、世界地図に興味を持ち、地図を求めた。自分たちの生活に直接関係なく、利益にもつながらぬものに興味を持ったこと自体、江戸時代の文化程度の高さを物語るといえよう。

幕府の施策、出版事情により、一般の人々の手に渡ったのは、正確な地図であったとは言えない。多くの人々は、地球の南方にある巨大な大陸の存在を信じていただろう。あるいは蘭学者達の地図と比べて、不可解に思ったかもしれない。現代の我々が、地球外生命体や、月の水の存在を半信半疑でいるような状態が、江戸時代の人々にとっての南方大陸であったのではあるまいか。

ヨーロッパで起こった実証主義が広がるのを幕府が阻止しようと腐心したにもかかわらず、蘭学者達の耳目を属することになり、結局は幕府の崩壊に繋がっていった。これは蘭学者達の、厳しい道も物かは、の飽くなき知識欲、探求欲のすさまじさを物語るとともに、そのような人々を生んだ、「江戸」の土壤の肥沃さをも示している。学問を志す者は士農工商の枠を越えて、己の学業研鑽だけを目的に精進することができたのである。中国や朝鮮のように、科挙という官僚選抜によって、学問の獲得が権力の獲得を意味した構図とは異なる。

景保の地図に見られるように、結局正確な地図を手にしたのは権力者側だった。しかし、幕府を朱子学の世界に安寧させず、実証主義（蘭学）の獲得に邁進させたのは、外国からの脅威もあるうが、在野の蘭学者達による真理探究の活力に抗する力を養うためでもあったろう。

今では、毎年70万人もの日本人が訪れるオーストラリア。何気なく私たちが目にするオーストラリアの地図が、現在の形を呈するに至るには、長く困難な道程があったのだ。

註

1. 織田武雄、室賀信夫、海野一隆『日本古地図大成世界図編』（講談社、1975）35頁。
2. 開国百年記念文化事業会編『鎖国時代 日本人の海外知識』（原書房、1978）197頁。
3. Ibid., 34頁。
4. Ibid., 143頁。
5. Ibid., 148頁。
6. Ibid., 184頁。
7. 開国百年記念文化事業会編『鎖国時代 日本人の海外知識』（原書房、1978）234頁、235頁。
8. 頼祺一「儒学、国学、洋学」『日本の近世』13（中央公論社、1993）337頁。
9. 新井白石「西洋紀聞中」『日本思想大系』35（岩波書店、1975）28頁。
10. 室賀信夫『古地図抄』（東海大学出版会、1983）158頁。
11. 王家華『日中儒学の比較』（六興出版、1988）156頁、157頁。
12. 西山松之助『甦る江戸文化』（NHK出版、1992）120頁。
13. 今田洋三『江戸の本屋さん』（NHKブックス、1977）105頁。
14. 渡辺華山「外国事情書」『日本思想大系』55（岩波書店、1971）48頁、49頁。
15. 杉田玄白著『蘭学事始』（岩波文庫、1967）45頁。

その他の参考文献

- 岩下哲典『江戸のナポレオン伝説』（中公新書、1999）
- 諏訪春雄『出版事始』（毎日新聞社、1978）
- 船越昭生『鎖国日本にきた「康熙図」の地理学史的研究』（法政大学出版局、1986）
- 愛媛県歴史文化博物館『伊予の蘭学』平成9年度企画展図録（愛媛県歴史文化博物館、1997）
- たばこと塩の博物館編『航路アジアへ！——鎖国前夜の東西交流』開館20周年記念特別展図録（たばこと塩の博物館、1998）
- 応地利明『絵地図の世界像』（岩波新書、1996）
- 海野一隆『地図の文化史』（八坂書房、1996）
- 織田武雄『地図の歴史—日本編』（講談社現代親書、1974）
- 織田武雄『地図の歴史—世界編』（講談社現代親書、1974）
- ブリッカー、チャールズ・矢守和彦訳『世界古地図』（日本ブリタニカ、1981）
- 久武哲也他『地図と文化』（地人書房、1989）
- 平川祐弘『マテオ・リッチ伝』（東洋文庫、1969）
- キーン、ドナルド・芳賀徹訳『日本人の西洋発見』（中央公論社、1968）
- 市村祐一他『ゆるやかな情報革命』（講談社現代親書、1995）
- NHKデータ情報部編集『江戸事情、文化論』（雄山閣、1992）
- 船橋春雄『鎖国の窓』（東洋エージェンシー、1986）

付録

オーストラリア探検に関する年表

- 1498 ヴァスコ・ダ・ガマ、喜望峰をまわり、インド西岸に到着。インド航路発見。
- 1520 マゼラン海峡の発見。ヨーロッパ人として初めて、太平洋横断。地球球体説を証明。
- 1543 コペルニクスの地動説
- 1570 フランドルの地図製作者オルテリウスが地図帳『世界の舞台』出版。オーストラリアがニューギニアの一部なのかどうかは、「誰一人、確かなことは言えない」と書く。
- 1600 イギリスが東インド会社を作る。
- 1602 オランダ東インド会社設立。インド及びインドシナ周辺諸島との貿易で儲けをねらう。
- 1605 オランダ人ウィレム・ヤンスゾーン、ニューギニアからオーストラリアにかけて航海。「人食い人種」のオーストラリア原住民に9人の乗組員が殺される。記録に残る最初のオーストラリア発見。
- 1605 ポルトガル人ペドロ・フェルナンデス・デ・キロス、カトリック教会の伝導の目的でカヤオを出航。ニュー・ヘブリディーズ諸島に到着した時、この大陸が南極まで広がっているのではないかと考えて、領有宣言。アウストリア・デル・エスプリツ・サント（精霊の国オーストラリア）と命名。仮説の南方大陸か、島が確認せずに帰る。
二週間後、キロスの後に残った提督ルイス・ヴァス・デ・トレスは、ニューギニアとオーストラリアの間の海峡を通過。これによりニューギニアが島である事がわかる。しかし、この公式報告書は、国立古文書館に埋もれる。
(1767年に、アレクサンダー・ダールリンブルがこの事実を公表。キャプテン・クックの1768 - 71の第一回航海で確認。)
- 1616 オランダ船船長ディルク・ハルトフ、オーストラリア西海岸発見
- 1618 オランダ船船長レナールト・ヤコブスゾーンが「ウィレムズ川」記録
- 1619 オランダ船船長フレデリック・デ・ホウトマンがオーストラリア南方の島々を発見。
- 1622 オランダ船ルーウィン号オーストラリア南西端周航
- 1629 オランダ船バタヴィア号のアプリリヨスでの難破後、反乱が起こり、犯人二人は、オーストラリア本土に追放。オーストラリアの事物について詳記された最初の記録。
- 1630 フィリップ・エッケブレヒトの「ルドルフ天文表の独特なる子午線計算法応用の世界新図」発表。ヨーク半島の地名を載せた最初の図。
- 1642 東インド会社アベル・ヤンスゾーン・タスマン、「仮想の南方および東方大陸の発見と探検のための航海」へ。ファン・ディーメンス・ラント（タスマニア）

発見の八日後スターテンラント（ニュージーランド）発見。この土地が未知の南方大陸の一部だと確信。彼がニューホランドと命名した陸地が完全に航行可能な海に囲まれているとわかる。

- 1644 タスマンの二度目の航海。ニューギニアとオーストラリアの間の海峡を見落とし、ニューギニアは、オーストラリア本土だと思う。
- 1648 オランダの地図製作者ヨハネス・ブラウが「大地図」にタスマンの発見を記録したが、他の地図製作者は無視する。ブラウもブラウ商会の地図には、古い地図を使う。
- 1651 フランスの地図製作者ニコラ・サンソンは古い地図に架空の北部海岸線を加えた地図を作る。オーストラリア、ニューギニア、タスマニアがくっついたこの地図が75年に渡って権威となる。
- 1688 イギリスの海賊の船長ウィリアム・ダンピア、オーストラリア西海岸メルヴィル島へ。1697年に『世界周航記』を出版、人気となる。
- 1689 フランスのアレクシス・ユベール・ジャイヨは、オーストラリア、ニューギニア、タスマニアが架空の海岸線でつながった大陸をなす地図を発表。
- 1730 アムステルダム地図製作者ヤンコフェンスとコルネリス・モルティエルがジャイヨ図を重版。
- 1739 オランダ人ヘンドリック・デ・レスは、ニュージーランドとオーストラリアがつながった地図を発表。
- 1768-71 イギリス人キャプテン・クックの1回目の航海。オーストラリアの東岸およびニュージーランドの海岸線を計測。
- 1772-75 クックの2回目の航海。これ以上進めないところまで、氷塊の中を南に進み、世界の底辺に広大な大陸があるという伝説を覆す。
- 1776-79 クックの3回目の航海。クック、ハワイ島で島民に殺される。
- 1773 クックの第一回航海記録がニュー・サウス・ウェールズの地図と共に出版される。直ちにフランス語に翻訳される。
- 1776 アメリカの独立宣言
- 1788 イギリスの囚人達による入植開始（アメリカに囚人をもう送れないため。）
- 1797-98 イギリス海軍中尉マシュー・フリンダースは、軍医助手ジョージ・バスと共にタスマニア島を周航。タスマニアが島であるとわかる。
- 1810 イギリスの地図製作者ウィリアム・フェイデンが、「ニュー・ホランド」の代わりに「オーストラリア」を用いる。
- 1840 アヘン戦争

蘭学関係日本史年表

- 1543 ポルトガル人が鉄砲を伝える。南蛮貿易が始まる。
- 1549 フランシスコ・ザビエルが鹿児島にくる。キリスト教伝来。
- 1552 ザビエル死す。マテオ・リッチ生まれる。
- 1573 室町幕府滅びる。
- 1580 スペイン人及びイギリス船が平戸に来る。
- 1582 天正の少年使節をローマに派遣。本能寺の変。
- 1584 ポルトガルの商戦が平戸に来る。
- 1585 豊臣秀吉が関白となる。
- 1587 キリシタンを禁ずる。
- 1590 ローマから少年使節が帰る。
- 1592 秀吉の朝鮮侵略
- 1598 秀吉死す。
- 1600 関ヶ原の戦い
- 1602 マテオ・リッチ、中国で「坤輿万国全図」を発表。
- 1603 江戸幕府の成立
- 1609 オランダ東インド会社商館が平戸に開かれる。
- 1613 キリシタン禁制
- 1618 通商にかこつけてのキリスト教布教を禁止
- 1623 平戸のイギリス商館を閉鎖
- 1624 スペインとの関係を断絶
- 1623 長崎へ輸入する支那書のうち、天主教に関するものを禁止
- 1633 第一次鎖国令
- 1636 第二次鎖国令
- 1639 鎖国の完成。「邪宗門教化之書」の輸入禁止。32種の漢籍が輸入禁止されたが、そのうち30ほどは、西洋技術の紹介書。
- 1641 平戸のオランダ商館を長崎出島に移す。
- 1658 大村藩内のキリスト教信者603人を処刑
- 1661-73（寛文年間）出版統制。江戸来た町奉行が、軍書類、暦類、など具体例をあげて、本屋が疑わしい出版物を出したら、番所に届けるように指図。
- 1673 徳川家に関することは言うまでもなく、何でも珍しいことを出版するときには、町奉行所に届けるという法令。（珍しいこと、変わったことは、それだけで罪になりうる。）
- 1684 時事的報道（瓦版）時事に取材した書物の板行を禁止する触書
- 1685 長崎に運んできた輸入漢籍にキリスト教関係書が紛れこんでいたことで、書物残品焼き捨て
- 1698 出版取締令
- 1702 赤穂浪士の討ち入り
- 1703 出版取締令
- 1708 イタリア人密航者シドッチが逮捕される。新井白石が尋問の任に当たる。

- 1709 新井白石の政治改革が始まる。
- 1713 出版取締令
- 1715 新井白石が『西洋紀聞』を著す。〔新井家に秘蔵され1793年に白石の玄孫が幕府に献上。1882年大槻文彦が初めて刊行〕
- 1716-45 徳川吉宗の享保の改革
- 1720 洋書輸入の禁をゆるめる。
- 1734 『ターヘル・アナトミア』刊行
- 1765 鈴木梨春『紅毛談』（おらんだばなし）刊行。絶版を命じられる。
- 1766 杉田玄白、前野良沢と共にオランダ語を学ぼうと大通詞西善三に頼むがあきらめるよう説得される。
- 1773 『解体約図』刊
- 1774 『解体新書』出版
- 1786 林子平、『三国通覧図説』出版
- 1787-93 松平定信の寛政の改革
- 1790 「寛政異学の禁」が制定される。寛政の出版取締令発布。
- 1791 林子平、『海国兵談』を自家出版。翌年処罰。『三国通覧図説』も絶版に。
- 1792 ロシアのラックスマン来航。通商を求める。
- 1794 蘭学者達が新元会を開いて西暦の正月を祝った。（オランダ正月）
- 1800 伊能忠敬、蝦夷地を探検
- 1804 ロシアのレザノフが来航し通商を要求。
- 1805 華岡青洲がはじめて全身麻酔に成功。
- 1808 間宮林蔵、樺太を探検
『北海異談』作者南豊事、引き回しのうえ獄門へ。本の中で、レザノフ来航、その後の、ロシア船の樺太エトロフ襲撃、林子平の警告が的中と書く。
- 1810 幕府天文方高橋景保、「新訂万国全図」発表
- 1815 杉田玄白が『蘭学事始』を著す。
- 1821 伊能忠敬が「伊能図」を製作。
- 1824 ドイツシーボルトが鳴滝塾を創設。
- 1825 外国船打払い令
- 1828 シーボルト事件。高橋景保、シーボルトに禁制の日本地図を与えた罪でとらえられ、翌年獄死。
- 1837 大塩平八郎の乱
- 1839 蛮社の獄。渡部華山と高野長英が言われなき幕府批判の罪で逮捕される。
- 1841-43 水野忠邦の天保の改革。出版取締令発布。
- 1842 寺門静軒の『江戸繁昌記』処分される。卑近なことが漢文で書いてあるため林大学頭の逆鱗にふれる。
- 1853 米国のペリーが黒船で来航。
- 1856 吉田松陰が松下村塾を創設
- 1856 安政の大獄。井伊直弼は、尊皇攘夷派の吉田松陰、橋本左内らを処刑。
- 1859 神奈川、長崎、函館の三港を開港。
- 1867 大政奉還

日本の地図

系統	年号	名称	作者	オーストラリアの表記	形状
南	江戸初期	世界図（屏風）		墨瓦臘泥加	南極と続く雲状
南	江戸初期	万国絵図（屏風）		MEGALAICA NON DVM COGNITA	南極と続く雲状
南	1652	世界図（屏風）		この国 人のありなし知らず	南極と続く雲状
マ	1652 （慶安5年）	万国総図		なし	ニューギニアと一体化した巨大な大陸
マ	1688 （貞享5年）	万国総界図	石川俊之	なし	ノウハキ子ヤ（ニューギニア）と分離。南極と続く巨大な大陸。
マ	1698 （元禄11年）	世界図（屏風） お	渋川春海	なし	のびぎ称阿と南極と一体の巨大な大陸
マ	1708 （宝永5年）	世界万国地球図	稲垣光朗	なし	ノウハキ子ヤ 南極と一体。
マ	1720 （享保5年）	輿地図	原目貞清	なし	ノウバキ子ヤと南極が一体。
マ	1725	「本朝天文図解」地球2図	淨嬰	なし	のびぎ称阿、南極と一体
東	1728 （享保13年）	中華古今分国大成図	西田榮欣	なし	墨瓦臘泥加が南極と一体の小さな島
蘭	1759 （宝暦9年）	地球分双卯西五帯之図	沢田貞矩	なし	名はないがオーストラリア、ニューギニアは南極から生えた半島のような
蘭	18世紀中期 （江戸中期）	和蘭新定地球図		ワランティアノーハ	ニューギニアと一体。ブラウの地図と似る。
蘭	1775 （安永）	フィッセル改訂ブラウ地図		オーストラリア西側 新忽尔蘭埚亜	不明なところ白抜き ニューギニアと一体
蘭	1775	地球図	林子平	新忽尔蘭埚亜	ニューギニア、南極とつながる
マ	1783 （天明3年）	地球一覽図	三橋釣客	ノウハキ子ヤ 墨瓦臘泥加	ニューギニア、南極と一体
マ	1788 （天明8年）	地球万国山海輿地全国図説	長久保赤水	（ノウバキ子ヤ＋南極） 「南方大州」墨瓦臘泥加 （南極の方）「夜国」	ニューギニアと一体の巨大な南極大陸
蘭	1792 （寛永4年）	地球図	司馬江漢	ノウハホルランド （新オランダ）	大陸はニューギニアと一体。その南にインコグニタメガラシ大州
蘭	1794 （寛永6年）	北槎聞略	桂川甫周	（ノウヤホランジャ） 新和蘭地	ニューギニアと離れたスマニアは一体
蘭	1796 （寛永8年）	蘭新訳地球全図	橋本宗吉	ノーハホルランド （南極）墨瓦臘泥加	ノーハホルランドとニューギニアがつながる
マ	1802 （享和2年）	坤輿全図	稲垣子箭	墨瓦臘泥加 「新オランダ」半島	ニューギニアと一体 巨大な南極大陸」

蘭	1802	円球万国地海全図	石塚催高	新忽尔蘭埜亜	墨瓦臘泥加は南極新忽尔蘭埜亜とノウハキネアの境曖昧
蘭	1810 (文化7年)	新訂万国全図	高橋景保	新阿蘭陀	タスマニア、ニューギニアと分離
マ	1822 (文政5年)	万国全図	高木正朝 写	墨瓦臘泥加	墨瓦臘泥加と南極界 泉が一体
蘭	文化文政 頃	万国輿地全図	松原右仲	新和蘭	未確認部分多し
東	1829 (文政末期)	蘭浮提図附睦図		新阿蘭陀	ニューギニア、タスマニアと分離
幕	1836 (天保7年)	地球万国全図	松本儀平	新ラランダ (新阿蘭陀)	ニューギニア、タスマニアと分離
蘭	1846 (弘化3年)	銅版万国方図	永井則	新和蘭陀 アウストラリー	ニューギニア、タスマニアと分離
蘭	1847 (弘化4年)	新製輿地全図	箕作省吾	新和蘭陀 豪斯多刺里	ニューギニア、タスマニアと分離
幕マ	1847 (弘化4年)	万国山海輿地全図	赤水周泉	墨瓦臘泥加 新阿蘭陀 (州の名前として使用)	ノウハキヤ、南極 とつながる
幕マ	19世紀中 期 (江戸末期)	地球万国会図説 覧	小林公峯	南方大洲、豪斯多刺里亜	ニューギニア、南極 とつながる
幕マ	1850 (嘉永3年)	地球万国山海輿地全図説	山崎美成	墨瓦臘泥加 南方大洲	ニューギニア、南極 とつながる
幕	1850 頃	万国地球全図	栗原信	新和蘭陀、豪斯多刺里亜	ニューギニア、タスマニアと分離
蘭	1851 (嘉永4年)	校訂輿地方円図	鱸重時	和蘭陀アウスタラリー州 豪斯多辣利州 新和蘭	ニューギニア、タスマニア
蘭	1852 (嘉永5年)	新訂坤輿略全図	新発田収 蔵	新忽尔蘭埜亜州	ニューギニア、タスマニアと分離
蘭	1852 (嘉永5年)	新訂地球万国方図	中島彰	新阿蘭陀 豪斯多刺里 (州の名として)	ニューギニア、タスマニアと分離
蘭	1855 (安政2年)	重訂万国全図	山路諧孝	島 州	ニューギニア、タスマニアと分離
蘭	1856 (安政3年)	万国地球分図	近藤 山	豪斯多辣里亜国州 新阿蘭陀 (ニウボルランド)	ニューギニア、タスマニアと分離
蘭	1858 (安政5年)	輿地般海図	武田簡吾	豪斯多辣里亜	ニューギニア、タスマニアと分離
幕	江戸中期 19世紀半 ば	世界六大州		南方大州 墨瓦臘泥加 新阿蘭陀	ニューギニア、南極と つながる

東：東洋的

マ：マテオリッチ系

蘭：蘭学系

南：南蛮系

幕：幕末民衆の世界図

